

ミシュナ時代のイスラエルにおける土器の破れと断片

牧野 久実 (教育学科)

Broken Pottery and Fragments from the Mishnaic period of Israel.

Kumi Makino

Department of Education, Kamakura Women's University

Abstract

This paper is a research note on the broken pottery and fragments from the Mishnaic period of Israel based on the excavation reports from Israel and descriptions of the Mishnah, the authoritative collection of Jewish oral law. These help us to understand the ideas of Jewish people concerning purity and impurity in Palestine during this period, and their attitudes towards pottery vessels and their conditions. This might bring a new perspective to the interpretation of archaeological materials that the author has studied.

Key words : pottery shards, repair, Mishnah, Kelim, Israel, impurity.

キーワード：土器片、補修、ミシュナ、ケリーム、イスラエル、穢れ

1. はじめに

考古学者にとって遺跡から出土する土器は研究の基本材料の1つである。型式や文様などから文化や相対年代を知る従来の手法に加え、この半世紀においては多様な科学的（化学的）手法も採用されてきた。例えば、放射性炭素により絶対年代測定を行う、付着した炭化物の窒素・炭素同位体比や残存脂質分析から土器の使用目的を特定する、胎土分析によって土器の生産や供給・流通状況や地域性を考える、胎土に混入した種子や昆虫から古環境復元を行う等、土器研究は新たな科学技術の進歩によって多様な情報を明らかにしつつある（最新の動向については、小畑弘己研究室 2024）。

本稿が目的とするのは、廃棄されてきた土器片、特にミシュナ時代のイスラエルにおいて当時の人々が捨てた断片、そして考古学者が発掘時にお

いて捨て去ってきた断片に関する研究である。生活の場が災害などで一気に埋もれたり、副葬品として墓に完形品が残る場合を除くと、多くは割れてしまった断片である。日本では出土断片全てを保管するが、イスラエルでは口縁部や底部といった特定の断片が研究用に保管され、それ以外の多くは廃棄される。イスラエルでは国土面積が四国ほどであるにも関わらず年間約300件の行政発掘と約50件の学術発掘が行われるという（Steinmeyer 2022）。こうした発掘件数の多さ故に保管場所に余裕が無いことが主な要因だが、従来からの型式研究が主流である点も否めない。

ところが、2017年5月にイスラエル北部シヘン遺跡調査に短期間参加した時のことである。前期ローマ時代の窯跡である発掘現場に足を踏み入れた際、廃棄され山積みになった土器片が他の遺

跡よりも小さいように感じた（写真1）。単なる印象に過ぎないが、以来ずっとその時に感じた違和感が忘れられずにいた。

窯で焼成した完成品は出荷されるため、シヒン遺跡に残された断片は失敗作と言える。失敗作の廃棄場所を灰原と称する。日本では灰原の発掘報告や研究事例が数多く見受けられる。例えば、埼玉県狭山市今宿遺跡では、近隣の入間市東金子窯で焼成されたひしゃげて亀裂が入った壺が奈良・平安時代の生活区から出土した。これは、本来流通しないはずの失敗作のうち比較的状态の良いものが近場で転用された事例と言える（狭山市役所 2013）。また、愛知県瀬戸市の巡間E窯跡では失敗品を大量に廃棄した堆積層が、また同市中洞窯跡では失敗品を利用して斜面を整地した跡が見つかっている（財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター 2003, 2004）。静岡県湖西市の湖西窯跡群でも窯跡近くから灰原が見つかっている（浜名湖西岸土地区画整理組合 2022）。



写真1 シヒン遺跡に散乱する土器片

これらを参考にするならイスラエルにおいても灰原や失敗作、廃棄されてきた断片が研究テーマになる。そのような着想に至ったもう一つのきっかけは2世紀頃に編纂されたユダヤ民族の口伝律法、ミシュナの記述にある。ミシュナは庶民生活を律するための指針で、種子の巻（農作物に関する法）、季節の巻（安息日と祭りに関する法）、婦人の巻（結婚と離婚、隣人に関する法）、損害の巻（市民の商売と刑罰）、聖物の巻（神殿の祭儀

に関する法）、清潔の巻（祭儀的な潔・不潔などに関する法）と全6巻から構成され、日常生活を律法に則って送るための手法が具体的に記されている。考古資料によるとユダヤ民族は少なくとも一部においてヘレニズム時代以後にギリシア・ローマ化が進み、紀元1～2世紀にはローマとの2度の戦争によって壊滅的な打撃を受けた。ラビ達は宗教的拠点であったユダ地域を逃れ、地中海沿岸部のヤヴネ、さらに北部、特にガリラヤを拠点としてユダヤ社会の復興を図った。180–210年にはベト・シェアリム、その後はセフォリス、さらにティベリアと中心を変えながらユダヤ社会のアイデンティティ強化を推進した（図1）。ミシュナが編纂されたのはこの頃である。



図1 南レヴァント ユダヤ戦争後の拠点

ミシュナ全6巻のうち、特に清潔の巻の器に関する項目（ケリーム篇）や清潔に関する項目（トホロート篇）は、食器や調理器を穢れから守るための工夫について記しており、土器の破損に関するものも含まれる。その記述は土器資料を生活者の視点でとらえるきっかけとなり得る。本稿では、ミシュナの編纂時期をミシュナ時代と呼び、その記述から生活者にとっての土器について整理する。

表1 本稿で使用したミシュナの和訳(三好 1997より)

KL2:1 類似例 KL15:1	「木製器と皮製器、骨製器とガラス器は、平ならぬ。しかし容器状ならば、破れうる。しかし、壊れるなら、潔い。それらから再び器を作るなら、その時点からそれ以後、破れを受けうるものとなる。土器と明礬製の器には、破れ(を受ける力)が同じようにある。(即ち、どちらも)破れうるし(それは直接触れなくとも、その内の)空気によって破れうる。それらが破れうるのは、それらの底部からであるが、それらの外側面からではない。しかし、壊れると清くなる。」
KL2:2	「土器の中で最小のものについて(それが壊れても、その縁についた)底と側面が支えられなくても立つことができるなら、(破れるための)規定量は、子供(の指)のように小さい部分で塗る(に足りる油を入れる)ほどのものである。(それは、壊れる前の土器全体として液体容量の)1ログ(の土器)にも(適用される)。(このような土器が壊れる前に全体として容れる量)1ログから1セアまでなら、(破れを受けるには、壊れた土器片の大きさが、その液体容量)4分の1ログはなければならぬ。【その後、大きさが異なる壺や鍋について液体容量を元にしたいいくつかの見解がラビ達によって出される *筆者追記】」
KL2:3	「(以下のものは)土器の中で清いものである。縁がない盆、(縁が)壊れた火鍋、(穀物を)炒る釜、そして樋は、曲がってしまっても、雨水受けができてしまっても、そしてパン焼用に作った円蓋、ぶどう房の(覆い)に転用された水差し、水浴者たちのための釜、杓子土器の側面に付けた把手の小釜、(土製)寝台、床几、長腰掛け、舟、土製の燗台、釜、これらは、破れを受けることはない。これが総則である。即ち、土器の中で、(物を容れる)内部がないものは、すべてその外側に(破れを受けることが)ない。」
KL2:4	「・・・陶器師の粘土は、彼が(製作を)それで開始しているときには清いが、それで先丁すると破れうるものとなる・・・」(油受けが中にある提灯について)
KL2:5	「ぶどう酒壺や油壺の覆いと、パピルス壺の覆いは破れを受け得ない。しかし、もしそれらを(容れる物としての)用途に応用するならば、それらは破れを受けうるものとなる。シチュウ鍋の覆いは、それに孔があいていて、(先が)とがっている限り、破れを受け得ない。もしそれに孔があいていないで、(先が)尖っていないならば、破れを受けうる。なぜならば、彼女は、その中に野菜(の水分)を運ぶことができるからである。ラビ・エリヤザル・バル・ツァドクは言う、「なぜならば、彼女は(シチュウ鍋の)中味をその上でひっくり返すからである」と。」
KL2:6	「・・・その製造が先丁するまでは、破れを受けない。その製造が先丁してからは破れを受けうる・・・」(罐の中に見出された遺骸について)
KL3:1	「土器を清くする(破れ孔の大きさを)基準は—食物に用いられる(土器)ならば、その(孔の大きさを)基準はオリーブほどである。液体に用いられる(土器)ならば、その基準は、液体(が流れ込むに足りる大きさ)のものである。どちらのためにも用いられるものならば、これをより厳格な規定に照準を合わせるべきである。即ち(その食料または飲料が通り落ちる孔の大きさを)オリーブほどである。」
KL3:2	「壺について—その(破れ孔の大きさを)基準は、干しいちじく(がその孔を通過して落ちる大きさ)にある。—ラビ・シモンは言う、ラビ・ユダは言う、「(その大きさを)基準は(胡提)にある」。ラビ・メイルは言う、「オリーブにある」と。鍋と平鍋について—その(孔の大きさを)基準は、オリーブ(がその孔を通過して落ちる大きさ)にある。律書と水差しについて—その(孔の大きさを)基準は、油(が通る大きさ)にある。冷却土器について—水(が通る大きさ)にある。ラビ・シモンは言う「これら三種の場合)・種子(が通る大きさ)にある」と。燗台について—その(孔の大きさを)基準は、油(が通る大きさ)にある。ラビ・エリヤザルは言う、「小さいベルグ(が通って落ちるほどの孔)にある」と。・・・」
KL3:3	「孔が開いてから濯いで修復された壺が(再び)割れたとすると、もし、濯ぎの(修復の断片)個所が、四分の一(ログ)相当ならば、それは破れる。なぜならばそれは、器という名を無にしているからである。孔が開いてから濯いで修復された土器は、たとえそれが、四分の一(ログ)相当としても、それは清いままである。なぜなら、それは器という名を台無しにしたからである。」
KL3:4	「ひび割れたが、それを(濯ぎの)蓋でつなぎ留めた壺は、たとえそれが蓋を取り去って土器片が落ちようとも、破れを受けうる。なぜならば、それに器という名が台無しにはならなかったからである。割れてしまっても(再び)土器片をくっつけるか、或いは、土器片を別の所から持ってきて、蓋でつなぎ合わせるか、たとえ蓋を取り去っても、土器片が立ち(続ける)としても、それは清い。なぜならば、それからは、器の名が台無しになったからである。その中に、四分の一(ログの液体)を含む土器片があるならば、そのすべては、接触によって破れうるが、しかし、その対はその空間内で破れを受けうる。」
KL3:5	「完全な土器につなぎ塗るものについて—ラビ・メイルとラビ・シモンは、そのつなぎ塗りは破れると宣言する。しかし賢者たちは言う、「完全な(土器)をつなぎ塗るものは清いままであるが、ひび割れたものを(つなぎ塗る)ならば、破れを受けうる」
KL3:6	「ぎょうぎ差接着剤で大瓶をつなぎ塗ると、その(ぎょうぎ差接着剤に)接触するものは、破れうる。壺の栓は、(壺とは)連結されていると見なされない。(破れた)壺とのつなぎ塗りに接触するものは、破れる。」
KL3:7	「・・・孔が開いて濯いで修復された瓶・・・」
KL3:8	「孔が開いて、必要量以上の濯いで修復された壺・・・」
KL4:1	「その耳のために、(支えなければ)立つことのできない土器片、または(底の先が)尖っていて、尖りがその(土器片の)均衡を崩すものなら、それは清い。耳が取られるか、尖りが壊れると(それはまだ)清い。ラビ・ユダは、それを破れていると宣言する。(底が)横にても、それがまだその側面にのを受け入れる壺、または、二つの艘の類のように割れた壺について—ラビ・ユダは清いとするが、しかし、賢者たちは、破れていると宣言する。」
KL4:4	「・・・土器は、いつから破れを受けうるのか—蓋で焼いて、その製造は先丁したときである。」(三つの縁取りをもつ土器について)
KL9:1	「・・・蓋でしっかり締め回されている・・・」(壺)
KL9:7	「・・・覆い蓋でしっかり締め回された形になって・・・」(濾過土板)
KL9:8	「・・・孔のあいた壺の栓・・・」(濾過土板)
KL10:1	「以下の器は、しっかり締まった覆い蓋によって(同じ天幕下の死体の破れから容器内のものを)防衛するものである—黄製の器、石製の器、(焼いた)土器、そして明礬製容器、黄銅製の器、そして、その皮の、海にいる動物の骨の、及びその皮からの容器、また、木製の(素に)清い器—これらは、(しっかり締まった覆い蓋が)これらの容器の口にあると、これらの側面にあると、これらの底に座っていると、これらの側面にもたれていようと、(同じ天幕下の死体の破れから、器内のものを)防衛する。ラビ・エリヤザルは、それを破れると宣言する。これらは、土製器は除外して、すべてを防衛する。なぜなら(土製容器は)食物と液体と土製器のみを防衛するからである。」
TH7:1	「陶器師が自分の陶器を置いて、飲みに下りていくと、内側の(陶器)は清いが、外側の(陶器)は破れた(と見なされる)。ラビ・ヨセは言った、「どのような状況でそれが該当するのか。それらが(互いに結ばれず)解かれている場合である。それが結ばれている場合には、すべてが清いと見なされる」と。・・・」
TH7:6	「盗人が家の中に入ると、盗人の足が入った範囲だけが破れた(と見なされる)。彼らは何を破るか—食料や飲料、そして(栓が)開いた土器。しかし、寝台や椅子、そして完全に栓が詰まっている土器は、清い(と見なされる)。・・・」

そして、考古学者として今後考え得る研究の方向性と意義について提示する。なお、本稿においてミシュナの和訳を引用する際には既存のもの（三好 1997）を使用した（表 1）。原文を確認する際にはマイモニデス版（Mechon Mamre 2002）を参照した。

2. ミシュナが示す土器の一生と穢れ

土器に関しては器（複数形）を意味するケリーム篇に主に記されている。なお、土器そのものはケリ・ケレス（קֶרֶס）と表現される。土器が受け得る穢れについては下記のような記述がある。「穢れの父は（以下のものである）－（死んだ）這うもの、射精、（人間の）死体の穢れを受けた（イスラエル）人、日数計算中の重い皮膚病患者、振りかけるには充分でない量の贖罪の水、－さあ、これらは接触によって、人と器を穢し、そして土器を（その中にある）空間によって（穢す）。しかし、これらは、運搬によっては（他を）穢さない。」（ケリーム 1:1 例文中の括弧内はヘブライ語原文にはなく和訳者の解釈として追記されたもの。以下も同様。）穢れの強度としては、上記の穢れの父を超えるもの（ケリーム 1:2-4）とそれよりも軽い段階（トホロート 1:5-9）があり、三好迪氏は大きく 5 段階に分類している（三好 1997 203 註13）。このうち、穢れの父を超えるものに関する部分には土器への言及が無いため、土器が関連する穢れとは「穢れの父以下」の食料と液体を含む要因と考えられる。

容器が穢れを受ける要因は、平らでない形状にある（ケリーム 2:1）。「平ら」を表す単語は「単純」を意味するパシュート（פשוט）で、これに対して「容器状」は「受ける」を意味するメカベル（מקבל）である。即ち、穢れも含めて何かを受ける形は平らではない。大きく捉えると、器（ケリーム）とは人の身体も含めて「受け入れ部」のあるものである。身体の細部に当てはめるなら、掌は穢れを受けうる形状なのに対し、手の甲はその恐れは無いと言える。容器の大半は受け部を有するように形づくられた時から容器状でなくなるほど破損する時までは、穢れを受ける可能性がある。容器は人と食材その他を橋渡しにする道具であるため、

容器の浄不浄は管理しなければならない。

土器の一生は粘土を採集して捏ねることから始まる。焼成の際の伸縮を防ぎ強度を増すために、砂、砕いた貝殻、藁などを調合し、調理器、食器、貯蔵器などに形作る。彩色や施文を施すこともある。その後乾燥させて焼成したものが完成品となる。完成品を使用するうち破損した場合は補修して再利用する、もしくは廃棄される。ミシュナにはこれらの過程においていつどのように不浄な状態になり得るのか、またどのように穢れを避けることができるのか、ラビ達の様々な議論も含めて記されている（表 2）。

まず、材料となる粘土についてであるが、粘土の産地や粘土の精製過程における穢れの混入についての言及は無い。穢れを受け得るのは製造が完了した時点からである（ケリーム 2:4, 2:6, 4:4）。土器の種類に言及している場合もあるが（提灯、甕腹（原文ではガステラ、即ちギリシア語の腹を意味する。恐らく胴部が膨らんだ甕のこと）、三つの縁取りをもつ土器）、いずれも粘土を用いて製造を開始する時点では清いが完了すると穢れうる。成形が完了するまでは形状が変化し確固たる受け部を持たないためであろう。考古学者は胎土そのものの産出先や調合材が製造技術や文化の特定に役立つとして重視するが、ミシュナが示す価値観からは、これらの要素は穢れをもたらず要因ではなく重視もされていない。

表 2 土器の一生

製作から廃棄まで	ミシュナからわかる関連情報	穢れの可能性
1 粘土の採集・調合	器としての形を成す前段階	言及無し
2 成形・調整・施文・乾燥・焼成	受け入れ部があるものは穢れを受ける可能性がある。 （ケリーム 2:1, 2:3） 蓋として形を成した段階から穢れうる （ケリーム 2:4, 2:6, 4:4） 製造工程を見張ることで穢れを避け得る（タホロート 7:1）	穢れ得る
3 完成品の使用	蓋を用いる（ケリーム 10:1-5、タホロート 7:6） 蓋を蓋として用いないように穴を開ける（ケリーム 2:5）	穢れ得る
4 破損と廃棄	破損して使用できない状態は深い（穢れを受けない形状） 自立しない状態（ケリーム 2:2, 4:1） 把手の片方が取れた状態（ケリーム 4:3） 破損以前と比べた液体の容量が十分に少ない状態 （ケリーム 2:2） 破損部が十分に大きい （ケリーム 2:3, 3:1, 3:2）	穢れ得る

他方、成形後は穢れを受け得るため製作工房での管理が重要となる。陶器師が飲み物を取りに陶

器置き場を少し離れただけでも、並べた陶器の、特に部外者の手に届きやすい外側が穢れに汚染する可能性がある（トホロート 7:1）。従って、土器を穢すことなく使い手のもとまで届けるためには、焼成、保管、運搬の段階でそれぞれ立法を遵守する者が管理しなければならない。ミシュナ時代に特定地域の窯で生産された土器が流通したことについてはすでに別稿に記したので割愛するが（牧野 2023）、こうした考古学的状況はミシュナの記述と関連すると考えられる。

完成した土器の使用については、直接・間接的に穢れとの接触を避けねばならない。その方法として、数種類の蓋によって容器の中身を守ることの重要性が記されている（ケリーム 10:1、10:2-5 も同様だが文例省略、トホロート 7:6）（牧野 2017, 2019）。なお、蓋を容器として用いることは穢れであり、これを避けるべくシチュウ鍋の蓋には孔が穿たれ（先が）尖っている（ケリーム 2:5）。本来の用途以外に器を使用することを穢れと見なすと解釈できるが、この点についてはさらなる検討が必要であろう。

壊れた状態は器としての最後の時であるが、「壊れるなら、潔い。それらから再び器を作るなら、その時点からそれ以後、穢れを受けうる」（ケリーム 2:1, 15:1）のように、壊れて廃棄する状態においてもなお穢れを受け得る。次項で述べるように、壊れた状態と破片の大きさがここで問題となる。

3. 破損と修復

壊れた土器から再び器を作る状態が穢れという前述から、再利用できないほどに破損したものは清い状態と解釈できる。では、再び器を作れないほどの破損とはどのような状況なのだろう。ミシュナにおいては、破損部があるために自立できない状態か、もしくは容器として機能しない状態かが決め手となる。そのために破損部の大きさが議論の対象となっている。

自立するか否かについては、耳、つまり胴部に付く 1 つまたは対の把手と底部を基準とする事例がある（ケリーム 4:1）（図 2）。破損した断片に把

手や尖底があると、その部分に凹凸が生じるために安定しない。即ち自立しないため、清い。但し、破損状態についてはラビ達の間で議論が分かれ、例えばラビ・ユダは、把手または尖底部分が破損しても穢れた状態としている。また、底が破損しても側面、即ち胴部が容器として使えるほど残存する、または壺全体が真っ二つに割れあたかも二艘の舟のように見える断片についても意見が分かれる。ラビ・ユダはこれを清いとしているが、他の賢者たちは穢れとしている。こうした記述は、把手と底部が容器の自立と機能の維持に重要であり、それらの破損状況が浄不浄の論点になり得ることを示している。



図2 自立しない断片（ケリーム 4:1より作成）

容器としての機能の有無を問う事例としては、破損前と破損後の液体容量から清い状況を規定するものがある（ケリーム 2:2）。容器の大きさや用途によってラビ達の間で異なる見解が示されているが、最小の土器の場合、破損前の容量が 1 ログ（卵 6 個分）の容器ならば、破損後の容量は子供の指に塗るほどの油を残す程度、破損前の容量が 1 ログ～1 セア（24 ログ、即ち卵 144 個分）なら、破損後の容量は 4 分の 1 ログを残す程度でないと、つまりばらばらに壊れた状態でないと「潔い」とは言えないとしている。

破損部の基準は、果物や木の実が通るかどうかで判断する（図 3）。食物用と液体用の容器で基準が少し異なり、食物用はオリーブ程度（直径約 2 cm）、液体用は液体が流れ込む程度だが、両方に適応できる厳格な規定としてはオリーブである

(ケリーム 3:1)。また土器の種類でも異なり、壺を清くする破損部の大きさをラビ・シモンは干しいちじく程度(直径約5cm)、ラビ・ユダは胡桃程度(直径約3cm)、ラビ・メイルはオリーブ程度と異なる見解を示している。また、鍋と平鍋はオリーブ程度、細首壺と水差しは油が、そして冷却土器は水が通る程度(直径約1cm)という基準が一般的な見解だが、これに対しラビ・シモンは種(原文ではジロニム(זֵירוּנִים)「精子」の意もあり)が通る程度としている。また、燭台については油が通る程度としながら、ラビ・エリエゼルはベルタ貨が通る程度(約1.5cm)としている(ケリーム 3:2)。

「壊れるなら、清い、それらから再び器を作るなら、その時点から穢れを受けうる・・・」(ケリーム 2:1, 15:1)からは、破損したものを修復して使用することは穢れと解釈できる。一方で、土器を修復することはあったようで(ケリーム 3:3-8)、家畜の糞(ケリーム 3:4)、瀝青(ケリーム 3:7-8)、植物由来(ケリーム 3:6)の接着剤が使われた。現代人からすると家畜の糞を使うこと自体が不浄であるが、ミシュナ時代のユダヤ人にとってはそうではなかったようだ。むしろ粘土と同様の素材と捉えられていて、糞製の器が粘土やガラス、明礬などの器と共に日常品として記されている(ケリーム 10:1)。実際、イスラエル南部のマサダ遺跡では糞と粘土を混ぜて乾燥させた容器が1世紀後半(66-73/74年)の層から複数出土しており、中には断片を縄で結んで修復したものもある(Bar-Nathan 2006 239-243)。

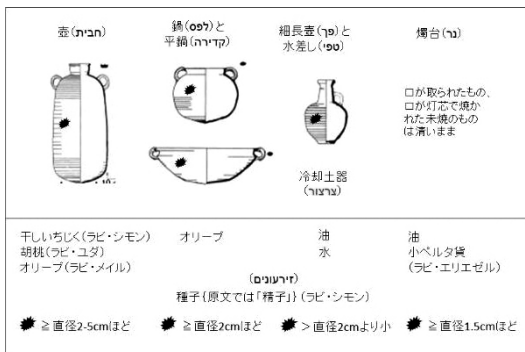


図3 破れ孔の大きさ(ケリーム 3:2より作成)

接着剤を用いた修復については、完全に孔が開いた部分に対する措置か(ケリーム 3:3, 3:5)、またはひび割れについてか(ケリーム 3:5)で浄不浄が分かれる。また、修復部分が再度破損したかどうかとも判断の対象となる(ケリーム 3:3, 3:4)。破損の前段階であるひび割れをあらかじめ補強することや、修理したが再び割れた、即ち再利用しようとしたものは穢れ(器という名が台無しにならない。または、器という名を無にしていない)である一方、完全に孔が開いた部分に他の土器片などを嵌めても元通りにはならない状態を清い(器という名が台無しになる。または、器という名を無にする)としている。

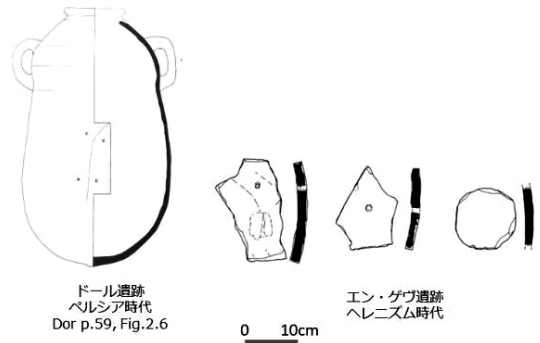


図4 修復した断片

遺跡からはしばしば修復した断片が発見される。総合的な研究はほとんど行われていないものの(例えば Dooijes et al 2009)、それらは保管され発掘報告書にも記録される。

実際にミシュナ時代前後を含むペルシア時代～ローマ時代のイスラエル各地の遺跡から出土した土器片を発掘報告書から探ると、いくつかそうした事例が見受けられる(図4)。それらは破損部分に小さな孔を穿ち、縄紐で括りつけるというものの、また胴部の一部を丸く切り取って角を削り(図3右端の1点)、恐らくは破損部分を閉じる材料として再利用した断片である。ただ、筆者が構築したペルシア時代～ローマ時代のイスラエル出土土器データベースによると、全9805点中でこうした修復した痕跡のある断片は僅か8点で、いずれもローマ時代よりも前のものだった。ミシュナ時

代を含むローマ時代には修復が行われなかったというわけではあるまいが、この点については今後調査遺跡の範囲を広げながらより正確な状況を見極める必要がある。

4. 今後の視点として

これまで見てきたように、ミシュナの記述によると、土器の壊れ方や破片の大きさにも宗教上の価値観が示されている。ミシュナ時代、またはそこへ至る土器片の大きさや修復状況は、単に壊れたから捨てた、または修理して使ったというだけにとどまらず、生活者にとって意味を有する。冒頭でも記したようにイスラエルでは特定部以外の土器断片は廃棄されるが、それらは生活者の視点を理解する宝の山と言える。

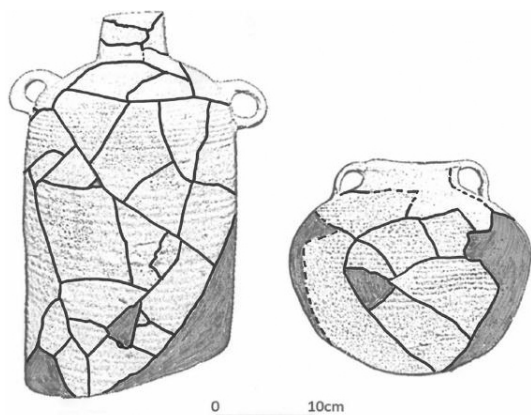


図5 ベニヤミン・ハウマ遺跡出土の接合土器
(Berlin 38; Fig.5, 46; Fig.13-2 より作図)

調査済みの遺跡から出土した土器片を上記の視点で見直すことは難しいものの、今後新たな発掘を行う際に向けたいくつかの研究の方向性を示すことはできそうだ。その1つは前項で述べた土器の修復状況であるが、もう1つは窯跡で発見される断片の大きさに関する研究である。窯跡で生産された土器は出荷を前提としているので、遺物として残される断片は失敗作として廃棄された可能性が大きい。例えば、ミシュナ時代前夜に相当する前期ローマ時代の窯跡であるベニヤミン・ハウマ遺跡の断片を発掘報告書 (Berlin, A. M. 2005) から観察してみた(図5)。部分的にパテで空白部

を埋めているようにも見えるが(図4の塗りつぶし部分)、大半は断片を接合したもので、個体全体の様子がわかるまでに復元されている。つまり、全体がある程度接合・復元できるほど残された1つの個体が何らかの理由により出荷されず、その場で壊れた、または壊されたことを意味する。ただし、遺跡に残された土器が破損する原因は他にもあり、遺跡形成時に壊れた、発掘時に壊れたなど、他にも理由が考えられる。残念ながら発掘報告書からはそうした情報を把握することはできない。このことがミシュナに記された断片の扱いと関連するのか、それとも偶然なのか、現時点では判断がつかないが、この時代の土器研究に廃棄状況が重要な意義を持つことは間違いない。この点は今後の方向性として留意すべきであろう。

冒頭に挙げたシヒン遺跡に残された大量の土器片も焼成後に出荷されなかった失敗作なのかもしれない。中にはベニヤミン・ハウマ遺跡からの出土物と同様に器としての形状を残すものもあったと想定できるが、ミシュナの記述を前提とするならば、それらの捨て方にも一考を要したのではないだろうか。筆者が発掘現場で受けた、他の遺跡よりも断片が小さいという印象について再調査する価値はある。例えば、イスラエルで時代が異なる灰原の1m矩形範囲にいくつかの土器片があるのか、またそれらの断片の大きさの平均値を人工知能により自動計測するといった試みである。捨てられる断片の量と大きさを調査することで、ミシュナに示された土器片に対する概念を考古学的に証明するような研究が可能かもしれない。

謝辞

本稿を作成するにあたって、文部科学省科学研究費助成事業『生きられた古代宗教の視点による古代ユダヤ変革期の東地中海世界の総合的宗教史構築』(課題番号: 20H00004 代表: 東京大学名誉教授 市川裕)の助成を得た。市川裕先生や同研究分担者には貴重なご意見を賜った。この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

引用文献

1. 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター 2003 『巡問E窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第118集
2. 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター 2004 『宇トゲ窯跡・中洞窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第124集
3. 浜名湖西岸土地地区画整理組合 2022 『古見古窯跡群—浜名湖西岸土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—』浜名湖西岸土地地区画整理組合
4. 牧野久実 2017 「ヘレニズム・ローマ時代のフターパレスティナからの出土例について—」『西アジア考古学』18号 89-98 日本西アジア考古学会
5. 牧野久実 2019 「パレスティナから出土したヘレニズム・ローマ時代のフター特に身との関係から—」『西アジア考古学』20号 85-96 日本西アジア考古学会
6. 牧野久実 2023 「ユダヤの食の規定、コシエルー変化と継承という視点から—」『鎌倉女子大学学術研究所紀要』31号 23-37 鎌倉女子大学
7. 三好迪 (翻訳・監修) 1997 『タルムード 6 トホロートの巻ケリーム篇他』三貴。
8. Bar-Nathan, R. 2006 Masada VII. The Yigal Yadin Excavations 1963-1965 Final Reports. The Pottery of Masada, Israel Exploration Society, Jerusalem.
9. Berlin, A. M. 2005 Pottery and pottery production in the Second Temple period. 29-60 In B. Arubas and H. Goldfus (eds.). Excavations on the Site of the Jerusalem International Convention Center (Binyanei ha'Uma): A Settlement of the Late First to Second Temple Period, the Tenth Legion's Kilnworks, and a Byzantine Monastic Complex, the Pottery, and Other Finds. Journal of Roman Archaeology supplementary series 60.
10. Dooijes, R., and Nieuwenhuyse, O.P., 2009.

Ancient repairs in archaeological research; a Near Eastern perspective, 8-13 In: J. Ambers, C. Higgitt, L. Harrison and D. Saunders (eds.) Holding it all together, Ancient and Modern Approaches to Joining, Repair and Consolidation, Archetype Books.

インターネット文献

1. 小畑弘己研究室 2024 『土器を掘る：22世紀型考古資料科学の構築と社会実装をめざした技術開発研究』令和2-6年度 文部科学省 科学研究費補助金研究 学術変革領域研究 (A) 領域番号20A102 熊本大学 (アクセス年：2024. 7. 29～)
2. 狭山市役所 2013 「第4回 須恵器短頸壺」『狭山歴史のしおり』狭山市役所 (アクセス年：2024. 7. 27～)
3. Mechon Mamre 2002 “Shisha Sidre Mishnah” (in Hebrew), (アクセス年：2013. 10. 10～)
4. Steinmeyer, N 2022 Salvage Excavation in Israel. BAR Interviews IAA's Head Archaeologist, Gideon Avni. Bible History Daily Biblical Archaeology Society (アクセス年：2024. 7. 29～)

要旨

考古学者にとって土器は歴史や文化を理解するために欠かせない。イスラエルでは完形以外の土器のうち特に口縁部や底部、そして特徴的な文様や彩色が施された部分と特に型式学的研究にとって有用な断片は保管するが、それ以外は廃棄される。こうした事情から、イスラエルでは出土土器片全体の量や大きさ、形状に関する研究はこれまで注目されていなかった。

本稿では、ローマ時代に編纂されたユダヤ庶民生活を律するための指針であるミシュナを参考に、古代の土器について生活者の視点で知りうることを整理した。その結果、粘土の採取から成形、使用、廃棄に至るまで、それぞれの段階に浄不浄の概念が反映されていることがわかった。とりわけ、生活者にとって廃棄断片の状態が重要であること

はこれまでのイスラエル考古学における土器研究
には無かった視点であり、今後に向けて新たな研
究の手がかりを得る機会となった。

(2024年8月14日受稿)